

見知らぬ妻へ 浅田次郎

新宿・歌舞伎町で客引きとして生きる花田章は、日本に滞在させるため偽装結婚した中国人女性をふとしたことから愛し始めていた。しかし——。(表題作)

才能がありながらもクラシック音楽の世界を捨て、今ではクラブのピアノ弾きとして生きる元チェリストの男の孤独を描いた「スターダスト・レビュー」など、やさしくもせつない8つの涙の物語。

解説・橋爪大三郎

解説

類型を使って類型をつき破る試み

橋爪大三郎
(社会学者)

本書に収められた八篇の最後、「見知らぬ妻へ」では、ジグソーパズルが効果的に登場する。主人公の花田章と、偽装結婚した「妻」の李玲明が、ばらばらになったピースをつなぎ合わせるべく、通じそうで通じ合わない二人。かと言って、このまま離ればなれとなるのではあまりに切ない——

「踊子」から「見知らぬ妻へ」までの八篇も、そうしたジグソーパズルのピースであるときえる。時代や場所を区切られ、それぞれの事情に置かれた男女が、大切な他者につながるうとしてつながり切れない、孤独のなかにもがいている。この世の中は、そんなふうには出来あがっていない。そうしたやせない諦念と寂寥感が、読者の肺腑にしみわたってくる。

どの作品も、恋愛小説の体裁をとっているが、その実質はむしろ、孤独小説とも言うべきものではないか。人生、こんなはずではなかった。どうしようもなく過ぎ去ってしまった時間。取り返しのつかない過去。主人公の誰もが、不本意な悔悟の念にとらわれている。恋愛は、そこから抜け出るひと筋の可能性の象徴なのだ。

では、人びとはなぜこも孤独なのだろう。それは、戦後という時代の失敗である。著者・浅田氏は、そんな診断を投げかけているように思われる。

新築の団地に移り住んだ喜び。青春の輝き。高度成長の喧騒のさなか、希望に満ちたあのころは遠い過去となった。幸せの予感、満たされなかった。どの物語も、主人公は、砂を噛むような苦い回想を背に、出口の見えない現在に閉じ込められている。世界は壊れている。

とりわけ、家族が壊れている。借金逃れの偽装離婚をきっかけに、実際に離婚してしまった夫婦。思う相手と結ばれないまま不本意な独身生活を続ける男女。巣立った子どもを送り夫に先立たれ、孤独死を選ぶ老婦人。濃密な家族のつながりからはじき出された人びとの、心の孤独が点描されている。

一つひとつの物語は、類型的でいかにもありそうだが、事件をはらんでいる。登場人物はどこにでもいそうだが、他人に推し量れない極端な部分をもっている。そうした設定と人物の交又する焦点に、著者は物語の核をひとつずつ結晶させている。

それぞれの物語のどれに深い思入れを抱くかは、読者によって異なるだろう。けれども、読者も孤独であるならば、こうした類型的な設定のどれかが当てはまり、人ごとではない事件

として、その物語を体験する。街角の占い師に吸いよせられ、出来合いの類型的ストーリーのどれかを納得して聞くことになる悩める人びとと同様に、あなたもなるほどと物語にひきこまれる。そして、世界はきつと、一人にひとつずつの、こうしたさまざま物語に満ち満ちているのだろうと得心する。

浅田氏の文学が、読者を動かす感動の核心は、物語が類型的にできていることによるのだと私は思う。新聞記事やゴシップや患者のカルテが類型的であるのと同じように、浅田氏の紡ぎ出す物語は類型的である。それはより多くの読者を、その平均値において確実にとらえるための工夫なのだ。

私は、ここで唐突だが、構造主義の神話理論を思い出した。

構造主義によれば、神話というものは、いろいろな要素(英雄/怪獣/美女/……、退治する/結婚する/交換する……)を組み合わせることで出来あがっている。そして、ある神話の要素をいくつか置き換えると、別な神話が姿をあらわす。そうした一連の神話の背後には隠れた「構造」があつて、そこに人びとの無意識が反映されている。

浅田氏の紡ぎ出す短編が、読者に与える印象は、神話と似たような効果なのではないだろうか。それは、経済成長の夢が終わった戦後日本の心象風景をかたどる、神話的な記述なのである。

作家としての浅田氏の手並みは、修練した職人を思わせる。人物や状況を類型化し、それを組み合わせてプロットを構成する。ここでは、地名の果たす役割も大きい。歌舞伎町や赤坂、中山競馬場、東京の近郊といった設定は、人びとの記憶の蓄積をたぐり寄せ、想像力を動員するための有力な手段になっている。

浅田氏の作品世界は、このように考えると、危うい均衡のうえに築かれているとも言える。構成される作品世界の要素は、精密に計算されたさまざまなイメージの平均値、すなわち、類型である。そうした要素が組み合わさって構成される世界は、同時代の読者の平均値に照準している。これが噛み合うとき、読者は、これこそ自分の読みたかった作品だと感じるはずだ——と、いちおうは言える。

けれども、類型どおりの世界が文字どおりに実在するわけではないし、平均値びつたりの読者が作品を読むとも限らない。そこで実際には、ある程度の誤差をあいだに挟んで、読者は作品と出会うことになる。その誤差を認知しつつ、「これは典型的に書かれた物語だ。世の中にはこういうこともあるだろう」と抱きとめ、自分をその類型の世界に当てはめて共鳴していくのが、浅田氏の作品世界の楽しみ方なのである。それは、著者と読者との共同作業である。

すると、誤差が大きすぎるか、自分の個性性にこだわりすぎるかして、類型の世界に身をゆだねることができない読者がいた場合は、どうなるか。そういう読者は、類型の世界を、通俗

と受け取るかもしれない。そして、著者との共同作業を拒否する。

著者は、こういうタイプの読者も意識しながら、類型をより研ぎ澄ませることで、それに対抗しようとする。より多くの読者を獲得することが、類型の精度と鮮度と確度を証明することになる。この、著者と読者の闘いにも似たかけひきが、浅田氏の作品世界を成り立たせる危うい均衡なのである。

多くの作家は、類型には当てはまらない、個性の強い人物や特別の事件を作品世界の中心に置くことで、類型の世界を相対化し、自分の位置を確保しようとする。

それに対して浅田氏は、類型の造形に徹底することで、作品世界の奥行きを深めるという方法をとっているように思われる。いわば、類型を使って類型をつき破る試みだ。

これは、興味ぶかい行き方である。そして、試みる値打ちのある行き方でもある。

というのは、読者は一人の作家の作品ばかりを読むのではなく、同時代の作家の作品を比較するものだからである。それぞれの作家が時代をどのように切り取り、めいめいの世界を構築するかを比較する作品世界は、そうした典型的なものひとつだ。

さらに言えば、浅田氏には、作品世界と同様にこの現実そのものも、類型によって出来あがっているという強い仮説があるのではないか。人びとは、都会に出ようとし、サラリーマンに

本書は、社会学者として日本と日本人が直面する教育や民生主義の危機に対して、わかりやすく、かつ積極的に発言する著者のこの数年の講演等を1冊にまとめたものである。

まず読んでみて感じることは、日本語を大切にしよう、という著者のメッセージが基調として濃厚にながれていることだ。アメリカで暮らしたときの経験談語る序章では「言葉(日本語)と人間(日本人)の関係」を、築き直すこと…簡潔で分りやすい表現を、必要ならつづけて、そうした言葉とおりこの社会を運営すること」といって、終章「日本人はいま何をすればよいか」では「政治家が、ジャーナリストが、科学者が、言葉それらに責任をもち、そのおりに行動する。これが基本だ」と思っていると語っている。これは、無に翻弄しながら、この本は「そのことが幸福のつくりかた」の第一歩だということを無意識やせてくねる。(田中判・290頁・1900円・ポット出版)

◎ 幸福のつくりかた
橋爪大三郎著